

迅速で確実な救助活動を実現させたい

昨年、ネパールを襲った巨大地震の際に、国際緊急援助隊・救助チームの一員として現地に派遣された山根誠さん。これまでの部署とは全く性質の異なる業務に戸惑いながらも、周囲との緊密なコミュニケーション、そして平時からの訓練や研修を大切に、職務にあたった。

着任直後のネパール派遣

以前、生命保険会社に勤めていたころ、内閣府のシンクタンクとして経済社会統計の分析や研究を行う「内閣府経済社会総合研究所」に出向しました。私が手伝っていたのは、経済環境の変化や財政・金融政策が、GDPなどに与える影響を評価するシミュレーションモデルの構築に必要なデータ収集です。あるとき、この計量手法が、JICAを通じてインドネシアの行政機関に紹介されることになったのです。当時の私は、JICAのことはよく知らなかったのですが、そのことをきっかけにJICAの業務について調べるようになり、次第に興味を持ちました。国の政策に関われるようなやりがいのある仕事がいい——。もともと海外での仕事に関心があった私は、JICAに就職することを決意しました。

入構13年目になる昨年4月、国際緊急援助隊事務局に配属されました。最初のブリーフィングを終えて、さあこれから訓練や研修に参加しながら仕事を覚えていこうと張り切っていた矢先、ネパールでマグニチュード7・8の地震が発生したのです。着任から25日目のことでした。

その夜、事務局にスタッフ全員が集まり、救助チームが成田空港を発する翌日午後のフライトまでに急いで準備を進めました。現地の情報収集をはじめ、70人のチーム編成や、十数トンに及ぶ資機材の輸送、現金の手配など、膨大な業務を十数時間でこなさなければならず、局内はまさに戦場でした。

私は救助チームの副団長として現地に入りました。担当したのは、資機材や資金の管理といったロジスティクス業務と、JICA本部や他の国際チームとの連絡調整です。初めての指揮官としての業務に戸惑いながらも、経験豊富な団長や他の3人の副団長らとの緊密なコミュニケーションを心掛け、2週間の派遣期間を全うしました。

大切なのは平時の訓練や研修

JICAのプロジェクトの多くは、あらかじめ計画を立てて入念な準備を行います。一方で、いつ災害が起きるか分からない緊急援助の場合はそうはいかず、極めて短時間で準備する必要があります。かつ、例えば飛行機の乗り換えの際に、救助犬が空港に取り残されたり、捜索や救助に必要な資機材が届かなかつたりすると業務に重大な支障を来すため、一つの失敗も許されません。そこが、この仕事の大きな責任であり、難しさだと感じます。

もう一つ、難しさを実感しているのは、救助チームとしての総合力をどう維持していくかということです。外務省、警察庁、消防庁、海上保安庁にも人事異動があるた



国際緊急援助隊事務局
緊急援助第二課

山根 誠
YAMANE Makoto

民間企業勤務を経て、2002年にJICAに就職。青年海外協力隊事務局、インドネシア事務所、財務部、農村開発部を経験後、昨年4月より現職。



今年10月に行われた救助チームの技術訓練。山根さんは隊員の前に訓示を述べた

め、派遣経験者が常にチームに所属していると限りません。そのため、常日頃から訓練や研修を重ね、いざ派遣となった際に十分に能力を発揮できる体制を整えることが大切です。

国際的な協調も欠かせません。今年9月には、世界中の捜索救助チームの代表が集まり東京で開かれた「国際捜索・救助諮問グループ（INSARAG）」の会合を、事務局が主催しました。災害時の円滑な調整をどう進めていくのか、国際チームとしてどのように能力強化を図っていくのかなど、議論が深まりました。

今年2月に起きた台湾地震の際には、調査チームの一員として、発災当日のうちに現地を訪れました。現地の人たちは、日本のチームがいち早く駆け付けてくれたことに対して非常に感謝しており、被災国から日本への信頼の大きさを改めて感じました。一人でも多くの生存者を救出するため、迅速に現地に到着できる体制と、チームの総合力をより一層強化していきたいと思えます。



ネパールに向かう航空機の中で打ち合わせを行う山根さん(右)